

ユウキSAOにてリスタート！

ワンパンチマン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

SAOのマザロザ篇を見てない人は分からない作品だと思うのでバックをしてマザロザ篇を見てください！SAOマザロザ篇を見たことがある人もこの作品を読んだあとに見てみてください！

タグは後々増える可能性があります。

# 目次

始まり	1
アスナの想い	4

## 始まり

声が聞こえる……誰の声なの？

ボクはこの声の人を良く知ってる気がする。

浮遊感と目が開かないからか暗く閉ざされた中にボクはいる。そんな気がする。

確かボクは……アスナの胸の中で……そうだ。

ボクはあの場所で死んだんだ。はは、短い人生だったけどボク頑張って生きたなあ……姉ちゃんに会えるかな？アスナとキリト達とスリーピング・ナイツの皆ともっと喋ったり笑ったりクエスト受けたりボス倒したり……もつとデュエルしたり……嫌だ……嫌だよアスナ。まだボク生きていたい、アスナと皆ともつと話したり遊んだりしたかった。

『後悔しているのかい？』

……誰？

頭に響いてきたのは、何処か機械音のような声。

『君は死んだことを後悔しているのかい？』

知らない声。

『誰……？』

『私かい？私は……そうだね。ここでは茅場晶彦と名乗っておこうか』

『茅場晶彦？』

機械音にノイズが走ったような声で茅場晶彦は紡ぐ。

『君がもし生き返られるとしたら？君はどうしたい？』

『生き返る？……ボク生き返られるの!？』

衝撃的な言葉に一瞬戸惑ったが生きられる。という声にボクはすがっていた。

『ただし。君の事を知っている者は誰もいない。そんな世界でデスゲームのプレイヤーとしてなら生き返るチャンスをあげよう』

『ボクの事を……？』

『そうだ。スリーピング・ナイトも存在しないし誰も君の事を覚えていない、アスナ君もね』

「そんな… それじゃボクの生きた証は」

『ただし。デスゲームクリア後、君にはプレゼントをあげよう。生きた証を再び歩いていくのも良いだろう。ただし負ければゲームオーバー。つまり“死”が待っている。君の生きた証は残せず誰の記憶にも残れないまま君という存在は消えていく』

ボクの生きた証が消えてしまふ、姉ちゃん。この時思い浮かぶのは、優しくかった姉の顔。困っていた時は何時も傍にいてくれて一緒に涙を流してくれた姉。

そんな姉がボクの背中を押してくれた気がした。

「分かった、ボクやるよ！」

『そうか。それでは君の武運を祈ってるよ——』

声は掠れていき聞こえなくなった時、ボクはユウキとして再び現実実《ゲーム》の世界に現れた。

ゴーン…… 鐘の音が響き渡る公園のような場所にボクは立っていた。姿を見ると紫色の髪がトレンドマークのもう一人のボクであるユウキ。腰に携えている剣は、冒険者になったばかりの装備。柄に触れてこの感覚に懐かしいなと思いを募っていると、周りから叫び声が聞こえてくる。

目の前にはいつの間にも現れたのか巨大な人形の何か。言葉を聞くとデスゲームに巻き込まれたというものだった。事情を理解していたボクだけは取り乱すこともなく、レベルを上げるために公園から立ち去ろうとするとウィンドウに！というマークが出てきて手鏡がアイテム欄に入っていた。どうやら使わなければいけないようだ。

手鏡を覗きこむと光に包まれる。何故か恐怖心は無く光が収まるのを待つと手鏡には、ユウキではなく、紺野木綿季が立っていた。まさかと思い、手で顔を触れてみたり髪を触ろうとするが髪の色は紫色から茶色に変わっており長い髪の毛は短髪になっていた。

「ボクだ……」

現実世界よりも慣れ親しんだ顔は今はなく、微かに手が震えるのが

分かる。ここはゲームの中。でもゲームオーバーは死に直結するデスゲーム。現実の自分を見たことで改めてその言葉の重みと現実味を肌で感じていた。

周りからは泣き叫ぶ声。絶望により顔を青くするもの。様々だ。そんな中で見覚えのある女の子をユウキは見付けた。

「あ、スナ?.....」

すぐ近くで膝を折って俯いている女の子。自分が大好きだった姉と重ねてしまうほど大好きになった相手を間違える筈がない。

「.....誰?」

「あっ.....」

会えたことに対しての嬉しさと興奮で忘れていたことを思い出す。今のボクはアスナと友達でもなければ知り合いですら無かった。

胸がいたい。急激に視野が狭まっていく、どうにか声を出そうにもアスナを見ることさえ出来ない。あんなにも会いたかった筈なのに。あんなにも一緒にいたいと思っただ筈なのに。

「あの...ごめんなさい。泣かしちゃって、何処かであつたことあつたっけ?」

アスナの声で自分が泣いている事に初めて気付いた。アスナの声はどこまでもボクの心に響き、どこまでも浸透していく。悲しさから嬉しさに、そしてまた悲しさに。まさにループだった。

「ううん。ごめんね、ボクの勘違いみたいだった」

だからここは初めて会った事にしよう。これから始めるために。

「ううん、私も少し気が紛れたから。私、ゆう...アスナって言うの。貴女は?」

知ってるよ、なんて心で思いながら声を高くして名前をいう。

「ボクの名前はね!ユウキって言うんだ!これからよろしくね!アスナ!」

これがユウキとアスナの初めての出会いになった。少しずつズレていく歯車の先には何があるのか分かるものはまだいない。

## アスナの想い

アスナと一緒に始まりの町を出て現在野犬を二人で狩っていた。あの後話しているとアスナはMMORPGのフルダイブでの戦闘はしたことがないらしくボクがレクチャーすること3分弱。最初こそ怯えていたけど今ではソードスキルのリニアを連発して野犬をオーバーキルしていた。速すぎる上達に少し頬が緩くなるのを我慢しながらアスナに聞く。

「ねえアスナ」

「何？ユウキ」

キユイーンというモーションの音にも聞きなれながら野犬にリニアで攻撃しながらアスナは返事をする。

「いや毎回ソードスキルのリニア使ってるけど相手のHPを見ながら攻撃した方が良いんじゃないかなって思ってる」

「え？」

心底意味がわからないという言葉を発しなくてもアスナの表情で伝わった。

「相手のHPがレットゾーンに入ってるからソードスキル使わなくても倒せるんじゃないかなって」

「確かに倒せるでしょうね」

「なら」

「でも、どんな倒しかたでも同じでしょ？」

殺されてしまうゲーム内で敵に対して同情したのはボクが初めてだろう。

「で、でもソードスキルは隙が大きいから囲まれたときは危ないよ？」

本来なら溜めの大きいソードスキルは隙が出来る。だけどアスナの持ち前のセンスなのか勘の良さなのか分からないが全ての攻撃を避けながら攻撃を浴びせるという離れ業をしている。ゲーム内であつても集中力をかなり使っている筈なのに息一つ乱れていないのは流石としかいえない。

だけどこれからの戦いで相手も強くなっていく、そんな中でソード

スキルのみで勝つなんてことできる筈がない。

「その時は、その時よ…」

どこか哀愁漂う雰囲気のアスナが口にする。最初にアスナと出会ったときには感じられなかった余裕の無さが今のアスナには感じられた。

剣を振るう度に焦燥が此方にも伝わってくる。でもそれは恐怖心からきてるもじゃない、もつと深い焦り。

「その時はって…アスナは死ぬつもりなの？」

「…ねえユウキ。この世界に来て始まりの町から出られずなにもしないままの人達って全体のどれくらいいると思う？」

ゲームが始まってから2日目が過ぎていた。ボク達みたいにくぐりにレベルを上げようと考えて動ける人は少ないと思う。それにちらほら見えたけど小さい子供だった。そんな子供達が死を乗り越えてゲームを出来る筈がない。そんな子供がいるとしたら狂気に満ちているか狂っている。

ボク自身こんなにも速く動けたのは、一度命を失っているという経験が大きい。それにもつと大事なことは、踏み出さなきゃなにも変わらない。動かなければ生きて証を残すことが出来ない。それじゃ生きて証を残すことが出来たボク自身に顔向け出来ない。

「多分…半分くらいじゃないかな」

この数は正しくないだろう。でも間違ってもいない筈でもあった。「そうね。このゲームの参加者の人数がおよそ1万人。家族がナーブギアを外そうとして無くなってしまった人は100人はいたそうよ。これはアルゴから聞いたから間違いないわ」

アルゴは嘘の情報や裏の取れない情報は絶対に売らないと言っている情報屋でありそのアルゴが言っているのなら間違いないだろう。「そして現在もゲームオーバーになっていくプレイヤーが後をたたないわ。その殆どがβテスターと言われているけど、こんな世界になっちゃったのならβテスターである彼等の力は必要だと思わ。でも減り続けていく。それも第一層というこの場所で。ユウキはどうしてだと思っ？」

「βテスターがやられている理由。恐らくモンスターへの攻撃パターンが変わっているんじゃないのかな？第一層の相手なら嫌ってほどレベルを上げるために戦っている筈だし」

「そう。そしてこれから戦いはもっと激化してくると思うわ。そのうち上層と呼ばれる人達、中層と呼ばれる人達が出てくる」

アスナの言っていることは間違いなく起こる。死を乗り越える速さは等しくない。SAOは完全レベル制のMMORPG。これはレベルを上げれば上げるほど強くなり逆に上がっていなければ弱いということ。簡単であり簡潔。それ故に差が出来る。

プレイヤーのスキルも多少は関係する。でもそれはレベルが拮抗している状態でのみ意味を成す。レベルが10離れていれば恐らくゲームをやり混んでいる人でも素人に負けることだってあるだろう。それがこのゲームの理不尽さでもある。

「その時に攻略をしている人達は何人いると思う？進めば進むほど攻略に加わっていない人達は？余計に圏外に出るプレイヤーも減ると思うわ。それにボスと戦って心が折れるプレイヤーだって出てくると思う。まだ第一層のボスとも戦っていないから5000人もものプレイヤーが圏外に出て戦っているけどいずれは100層までなんて無理だっと思う人達も出てくると思う」

「なら… ならどうしてアスナは戦うの？」

「私が、私でいるため。元の世界に帰れないと分かっているもただ時間を浪費して始まりの町で腐っていくくらいなら戦って最後まで私のみで死にたいから」

そっか、アスナはキリト達と出会った事で変わったんだね。ボクがスリーピング・ナイツの皆に会って変わったように、そしてアスナに会って救われたように。それなら。

「ねえアスナ」

今度はボクが恩返しする番だね。

「ボクと勝負しようよ」